

高嶋由布子*、有光奈美†

日本手話における談話構造、ポライトネス方略を調べるため、オンライン実験を行った。談話を日本語と比較するため、日本語の会話コーパスである BTSJ (宇佐美 2019) とスクリプトをオンライン実験向けに調整したロールプレイによる 3 種類 (①依頼の断り、②高負荷の謝罪、③低負荷の謝罪) の対話をオンラインで収録した。元々知り合い同士のネイティブサイナーのろう者ペア 12 組 24 名 (うち男性 13 名、20 代) が参加した。「日本手話は直接的である、結論を早く言う」というフォークセオリーに対し、①では、多くの参加者が自己理由を持ち出したことで「やさしい嘘」を用いてフェイスの侵害を避けるポライトネス方略をとるため直接的とは言えないこと、②では、日本語話者が謝るべき内容 (結論) について、それに至った理由などから言いさし文を使って相手に謝罪内容を推察させる方略をとることがあるのに対し、日本手話話者は結論を先に述べたり、理由から結論まで一気に示したりする傾向があることが明らかとなった。

キーワード：日本手話、語用論、ポライトネス、間接発話、謝罪、FTA (フェイス侵害行為) ‡

1. はじめに

日本手話は、日本のろう者が使う日本語とは異なる言語である。日本手話は聾学校をその母胎とし発展してきたため、日本語との二言語使用が標準的であるものの、威信言語である日本語の陰で、独自の言語文化を築いてきた。よって、その語用論的方略は異なるようである。言語使用は人間関係の中で行われるものであり、社会的要因が言語使用に影響を与えている。Austin (1962) が発話の行為遂行的な側面に着目し、発話するという行為を遂行することであると指摘したことは広く知られている。すなわち、発話するという行為は、単に音声を発したり、描写したりするだけでなく、実際に、聞き手に約束をしたり、命令をしたり、謝罪をしたりといった行為を遂行することである点を指摘した。

ポライトネスは、ブラウンとレビンソン (1978) (1987) が社会学的な行動選択の記述から発想を得て、言語コミュニケーションで、相手の社会的なセルフイメージを認識し、かつそれに配慮していることを示すために選択される方略のことを指している。

日本では、敬語体系の正しい使用が注目される傾向にあり、日本手話に関する先駆的な記述研究を行った米川 (1984) は日本手話に文法化した敬語体系がないことを、原初的な言語であるがゆえで、言語を発展させるために敬語体系を整えるべきだと説いた。しかし実際には、日本手話独自のポライトネス戦略は存在している。ポライトネス理論は、相手との関係性を文法的にコード化する方法を分析するだけでなく、相手のフェイスを侵害しないコミュニケーション方略の構造に着目し、相手との関係を適切に維持するための方略を分析する、語用論的な理論である。直接的に依頼・命令をすると、相手は「自己決定権」を侵害され (ネガティブ・フェイスの侵害)、かつ、断るときには「人には良い面を見せたい」というポジティブな自分のイメージを侵害される (ポジティブ・フェイスの侵害) ため断りづらいということになる。ゆえに、フェイスの侵害を避けるネガティブ・ポライトネス方略は、直接的に依頼をしない、ポジティブ・ポライトネス方略は、相手との接近や共感を示すことを意味する。Searle (1969) は、適切性条件を精緻化し、遂行文だけでなく一般的な文でも適切性条件をみたせば発語内的力 (illocutionary force) を持つことを指摘して発語内行為を一般化し、Searle (1975) で間接的言語行為 (indirect speech act) を理論化したとされる。この間接的言語行為は、ポライトネス方略のひとつとして用いられる。

本研究は「依頼に対する断り」「相手に不利益を与える/与えた自らの状況に対する謝罪」という発話行為

* 国立障害者リハビリテーションセンター研究所 (takashima-yufuko@rehab.go.jp)

† 東洋大学経営学部 (arimitsu@toyo.jp)

‡ 本研究は、多くのろう者の研究参加によって実現したものです。JSPS 科研費 19K21635 「否定と対比表現からみた日本手話の論理性とその身体性」の助成を受けたものです。ここに感謝いたします。

に着目している。二つはどちらもできれば選択したくない否定的な態度表明であると同時に、日常生活を送る上で場合によってはやむを得ず選択することが不可避でもある。そのような場面で、円滑なコミュニケーションを構築し、和やかな人間関係を維持発展させるために、日本語と日本手話では、どのような言語使用の選択が行われているのか、その特徴を解明することを目指した。

1.1 日本手話とその文化・コミュニティの構成員

日本手話は、日本固有の手話言語である。この言語は、1880年頃に京都と東京に聾学校（当時は盲学校と同じ場所にあった）が設立され、ろう児が集められたところで用いられたところまで遡ることができる。それ以前にも、聴覚障害児の集団があれば手話言語は発生し、継承する者が途絶えて散逸してきたと考えられ、それらのいずれかと現在に続く日本手話が一続きである可能性は否めないが、根拠は乏しい。現時点の日本手話は明治期からは聾学校およびその寄宿舎と、ろう者同士の結婚でその子どもへと継承されてきた、学校システムによって発達・維持・継承されてきた都市型手話とするのがよいだろう（高嶋 2020）。日本手話は日本語とは異なる視覚・空間を媒体とする言語である。日本語の単語を手指に置き換えたものという素朴な見方の払拭に苦しんでいるが、手指だけでなく顔（目や眉）や上半身の動きで表される非手指要素が文構造や発話への態度を示す言語要素になる。これは音声言語の超分節的要素であるイントネーション等より、文法・意味への寄与度が高い独特の要素である。

聾教育において、日本語が教えられなかったことはないため、日本手話はその出自から、両言語の習得度は一様でないにせよ、日本語とのバイリンガルである人々たちの間で発展してきた。また、ろう者は自分たちが威信言語である日本語を習得すると同時に、日本語を母語とする手話通訳者に日本手話を習得してもらう必要であるため、日本手話と日本語が顕著に異なる点は、日本手話を第二言語として学習する者たちに教えられ、共有されてきている。特に手話通訳養成において、「先に重要なことを言いなさい」「間接発話は避けなさい」という教育がされている（坂田ら 2008）。ただし、日本手話には、直接的で分かりやすく明示的に話さなければならない言語文化があるという説は、ともすると言語発達の非典型的な話者が多く含まれるために、直接的な言い方になってしまう「コミュニケーション障害」と捉えられることもある（高嶋 2023）。しかし、健全な方向としては、コミュニティの大きさや文化差として分析されるのが妥当であるし（アメリカ手話について Hoza 2007 参照）、吉岡(2013)は、日本手話にも多様なポライトネス方略を用いることを報告している。Roush(2007)は、こうしたステレオタイプ化に反論し、直接的な言い方は、親密な関係のみで用いるものだという民族誌学的な捉え方を発表した。日本でも、ろう者コミュニティは、マイノリティのコミュニティであり、聾学校は1クラス8人以下（現在では同級生が1人しか居ないなど、縮小化が著しい）、寮で共同生活を経験した人も多く、親戚的な親密な関係性が生まれやすい環境である。ろう者の米内山明宏は、手話学習者に向けた講演で「聴者はどんな赤ちゃんを見ても『かわいいねえ』と言うが、ろう者はかわいければ『かわいい』と言うし、かわいくなければ、『サルみたい』『おまえに似てかわいそう』と言ったりする。困ったものだ」と発言していた。こうした親密な間柄での、歯に衣着せぬ物言いは、親しみの表現として有効で、ポジティブ・ポライトネス方略に該当する。

日本手話でのこれまでの語用論の研究は、場面を設定し、相手が架空あるいは固定された穴埋め式ロールプレイ（Discourse Completion Task: DCT）が用いられてきた（吉岡 2013; 大塚 2019）。吉岡(2013)は、手話話者も間接発話などのポライトネス方略を用いることを明らかにした。大塚(2019)は、ろう者の第二言語としての日本語でのポライトネス方略は、日本手話の影響を受けていることを示した。しかし、架空の相手や、調査者に向かって答える DCT では、バイリンガル話者が多く、それぞれの習得度が異なるという多様性をもったコミュニティの語用論的特徴を調べるのに、限界がある。特に高い言語運用能力を持つ人ほど、相手が誰かによって、コミュニケーションの方略を使い分けることが予想されるし、相づちを打ってくれる相手がいないければ、特にフォークセオリー「先に重要なことを言う」を確かめるのは難しい。

また、ポライトネスマーカーとして、上半身の動きを丁寧さ、あるいは立場が高い人に対する敬意とする研究は存在する（George 2011 for JSL; Roush 2007, Hoza 2007 for ASL; Mapson 2013 for BSL）。非手指要素が丁寧さを加えるということは、日本語の丁寧表現（です、ます）や、敬語体系（おいでになる、召し上が

る)など形式上のバリエーションに対応していると考えてもよいだろう。吉岡(2013)は、Hoza(2007)が観察したポライトな顔しかめ(眉寄せ・目細め)が、日本手話にも見られることを報告している。

1.2 研究対象者について

本研究では、言語発達が、音声言語と同様に典型的な発達の道筋を経る(Newport & Meier 1985)、家庭内で出生時から手話環境にあるネイティブサイナー同士の談話を研究対象とした。日本手話を第一言語(最も良く運用できる言語)にする人たちを「ろう者」と呼ぶが、彼らは日本語を第一言語として習得しない先天的な重度難聴者である¹。その出生率は1000人に1~2人程度だが、そのうちろう者の親をもち、出生時から手話環境にあるネイティブサイナーはこの1割以下である(Mitchell and Karchmer 2004)。手話コミュニティ内では、先天的重度難聴だが、親が聴者で家庭でも学校でも手話を使わず、音声言語を第一言語として非典型的に身につけ、言語の運用やコミュニケーション経験が乏しいまま成長し、手話を使う聾学校に入学した6歳以降、あるいはさらに長じて青年期にろう者コミュニティにたどり着き、手話を習得する者もいる。

こうした多様な背景を持つ「ろう者」が集まるコミュニティでのわかりやすい話し方として、「直接的な言い方」が選択されているとすれば、それはネイティブサイナーの談話方略の一部になるかもしれない。一方で、本実験では、ネイティブサイナーが、知り合いのネイティブサイナーを相手にしたときを対象としている。よって理解できる言語使用に制限がある非典型的な話者や第二言語学習者である聴者を相手にしたときは、異なるコミュニケーション方略を用いられると予想できる。また、参加者の半数は、さらに親のどちらからもネイティブサイナー(祖父母にろう者がいる)という希少性の高い属性を持つ。教育歴は揃えることがむずかしかったが、聾学校を経験している人がほとんどであり、皆大学在学中か大学を卒業していた。子どもの頃からの知り合いで親も知り合いという組み合わせもあれば、大学で知り合った、あるいは大学生の全国的な集まりである全日本ろう学生懇談会で友達になって異なる地域で暮らしている、オンラインゲーム友達、などの組み合わせだった。関係性はばらつきがあるものの、知り合いとして相手がどのような話し方をするのか知っている文脈の元、自然な談話を展開できる背景があった。

また、日本のろう者コミュニティでは、ろう者は低コンテキスト依存なので、高コンテキスト依存の聴者に、一足飛びの談話にならない方法を教えるという信念がある。佐野(2019)は、手話学習者が、Yes/No疑問のとき、[はい][いいえ]を先に答えてから、続きを言う練習の指導法について発表している。しかし、筆者らの観察によると、ろう者が一足飛びの会話をするのは珍しいことではない。そこで考えられるのは、論理的展開が重要なのではなく、学習者が話し手のとき、聞き手の相づちに対して反応して談話を修正したり、談話の構造を示すマーカーが表せていなかったり、聞き手のとき必要な箇所での相づちが表出できていなかったりして、唐突に話が展開する感覚があるのかもしれないということである。

本研究では、ろう者同士のやりとりにおいて、どのような語用論的方略が適用されるのか、談話構造はどのようなものが選択されるのかについて、ネイティブサイナーの会話を採録し、分析することにした。

2. 方法

本研究では、より現実に近づけた構成の談話を採集するため、元々知り合いで出生時から手話環境にあるネイティブサイナーのろう者ペア12組24名(うち男性13名、20代、2組はプレ実験)に参加してもらった。友達同士で参加して欲しい旨伝えて機縁で募集を行った。プレ実験は対面で行ったが、新型コロナウイルス感染症拡大下により、オンラインでの実験を行った。セキュリティ対策が十分で機密保持契約がされているオンライン会議システムMicrosoft Teamsを用い、小型で高フレームレートで撮影できるビデオカメラ(DJI Pocket)とミニ三脚を参加者それぞれに送り、対話をオンライン会議で行うと同時に、ビデオカメラでそれぞれの参加者に撮影してもらった。この研究は、国立障害者リハビリテーションセンターの倫理審査委員会の許可を得て実施した。

¹親がろう者で聴者の子ども(CODA: Children of Deaf Adults)も母語・第一言語=first languageとして日本手話を身につけるが、威信言語である日本語も習得するバイモーダル・バイリンガルである。

日本語の日常会話コーパスである BTSJ (宇佐美 2019) との比較のため、BTSJ にある談話の一部をオンライン実験環境に合わせる変更をした類似のスクリプトを用い、ロールプレイによる3種類(①依頼の断り、②高負荷の謝罪、③低負荷の謝罪)の対話を収録した。現地で撮影されたビデオを回収し、オンライン会議で採録した映像によって同期をとって合成し、それぞれの談話映像データに単語区切りのミニマルなアノテーションを施し、非手指要素などは現時点では非母語話者によって分析した²。

実験は日本手話のみで進行し、介入を最低限にとどめた。実験に立ち会った第一著者は聴者の手話学習者であり、聴者がいることを強く意識させないため、幼少期から日本手話に触れているアーリーサイナーであり、実験参加者と同世代のろう者に、セッション開始からの説明の大部分を委ね、スクリプトも日本手話のみで提示し、3種類の談話を役割交代しながら6本を収録した。このうち、1時間ほど、感想や語用論的方略についての素朴な信念を尋ねるインタビューを行った。

3. 結果

①依頼の断り

スクリプト：明日、謝金なしで、300文をオンラインで評価するという実験の被験者を代わって欲しい、という依頼を断るものである。注目したいのは、依頼する方が恐縮するような悪条件で、だめ元でどのように依頼するのか、断る側もどの理由でどのように断るのか。

まず、依頼に際して、日本手話でも、[ごめんなさい][すみません]のような、フェイス侵害に対するマーカが最初に用いられる。[お願い/ある][お願い/かまわない]という、依頼開始を示す表現もよく用いられる。[本当(実は)][吐露(ぶっちゃけると)]のような、自分の事情の説明が始まるマーカがあり、次に、3つの条件をブイ(list buoy: 非利き手で数字を横に表し、順序だてて三つの項目を説明するときこれを指差してから1つめ～、2つめ～と参照する手話言語によく見られるデバイス: Liddle 2003, Ch.8)を出して順序立てて説明することが手話の特徴だった。BTSJの聴者女性は、断られるかもしれないけど、という体で依頼を行い、「場所が遠くて」「明日なんだけど」と急な日程についてだけで断っていいというキューを出し、謝金がないことについて話さないまま終わる会話も多く、逆接の「けど」を用いた言いさし文が多い。このことは、白川(2009:15)で「日本語のくだけた談話(特に話し言葉)においては[次のように]ケド節で言い終わる文がしばしば観察される」と指摘されていることとも合致する。

一方で、ろう者の場合は、最初にこれから条件の説明が続くというマーカとなるブイを利用し、それぞれの説明の終わりには、聞き手がへの字口で顎を引きネガティブな反応を示すが、ブイで予告されている3つの説明が終わるまでは聞き手は待ち、説明が終わってから、「明日は無理」とか、「謝金ないなら断る」などと自分の返答を述べる傾向にある。断れる条件が持ち上がった時点(明日なんだけど)で早速断る聴者と、最後まで聞いてから断るろう者という差がある。

聴者のポライトネスにおいては、「あの」「なんか」といったフィラーや「ちょっと」「～なんだけど」といった緩和表現・言いさしがあり、言うのをためらっている様子が観察される。手話でこのためらいの態度を表すのは、非手指要素である。Hoza(2007)が発見し、吉岡も日本手話で観察した眉を寄せ、目を細める、または、眉を上げて目を細めるという「ポライトな顔しかめ」が、この依頼で観察された。年齢が上の人においてお願いする仕方の方が、より丁寧で「ためらい」があると考えるのであれば、それはこの「顔しかめ」と、前のめりにならない姿勢である。年上への依頼のほうが、眉寄せ・目細めの度合いが高く、相手が同い年または年下のとき首が前に出る。市田(2005)によれば、眉下げは、話し手自身の側に契機があるもので、頭の位置が下であれば「説得」、後ろであれば「依頼・押しつけ」、前であれば「催促」である。前のめりの姿勢は積極的な依頼＝「催促」にあたり、断りを予期した依頼は、前のめりにならない。また、George(2011)が日本手話のポライトネスを研究したときに指摘した「肩すぼめ」の姿勢は、特に依頼者が年下の場合、観察できる。

依頼をされたとき、依頼を受ける方は、年上からの依頼であれば口をすばませて前に出す。これは「特に

² 非手指要素については、カテゴリー的な認知が第二言語話者には非常に難しいために、母語話者による確認が必要になり、この点については今後進めていきたい。

異論はない」ときの口型と一致するので続きを聞く態度を表す。また、眉を上げて目を開き、「私？」と返すことが多い。依頼をされたことを真面目に聞こうという態度の表出である。一方で、同い年または年下からの依頼だと、顎を上げる動作によって続きを待つ。

依頼を受けての断り方だが、ろう者も、BTSJの聴者女性も、最も多いのは自己理由による断り（明日は予定がある）を行っており共通点が見いだせた。依頼者が持ってきた条件が嫌だと表明すると相手の感情的な負担が増える。一方、自分の都合が合わないことは、相手の責任にならないため、このロールプレイの場でも、自己理由を創作し「やさしい嘘」で断り、相手との対立を避ける方略が選ばれている。しかし興味深いことに、ろう者の男性の6人（13人中）は、「謝金がない」ことを理由に断った。これは、相手の提示した条件をネガティブに評価するので、フェイスの侵害行為（FTA）になる。聴者女性（BTSJ）でも、年下や同級生相手では、26例中5例で「遠い」という提示された条件への評価で断りを行っていた。ただし、遠いから次の予定に間に合わないのが難しいなど、全面的な条件批判にはなっていない。ろう者男性の「謝金が出ないから」という理由も、依頼者への批判というより、時間がかかるのに謝金がないのは自分が学生だから苦しいという自己都合の説明もあった。また、依頼主を越えて、実験の主催者に対する批判、つまり顔出しするのに謝金がないのはおかしい、重たい依頼をするのに無料というのは「マナー違反」だといった、依頼した者に寄り添うという意味でのポジティブ・ポライトネス方略が用いられている。

②高負荷の謝罪

スクリプト：AはBにバイトを紹介してもらい、働き始めて2ヶ月である。Aは新しい条件のよいバイト（家から近く、給料が良く、採用される見込みがある）を発見し、元のバイト（より遠く、給料が安い）を辞めようと思っている。紹介してくれたBにそれを報告する。（Bはちょっとむっとするくらいには、頑張ってAを紹介したという文脈を踏まえてほしい。）

談話の構成として、ろう者の場合、[辞める]や[辞める 思う（辞めると思う）][辞める 希望 思う（辞めたいと思う）]と、[辞める]という単語を比較的はっきりと表出し、文を終わらせる。これに対し、聴者は「代わろうかなと思って」「違うバイトをしてみようかなって思い…」「辞めさせていたideきたいなと思っているんだけど、本当に申し訳ないんだけど」と、言いさし文になる傾向がある。Aが「今のバイトいいんだけど～」と言いよどむと、Bが「え、辞めるってこと？」と聞き手の方が推察して続けることもある。Aはフェイスの侵害を言いよどむことによって緩和するというオフ・レコード方略を用いている。ろう者が聴者の学習者は「けど」という語を多用する、語尾がはっきりしないという感想を持つようだが、言いよどむことでFTAを和らげるのが日本語話者の方略である。一方で、ろう者が辞めると伝えるときに、躊躇しているという態度を表出し、言いよどみをポライトネス方略として用いることは見られなかった。

ろう者の談話の特徴として、[辞める]の表出までが長いケースでも、Aが一息に理由から[辞める]までを表出していたことが挙げられる。これは、発話の冒頭で[相談 ある][本当（実は）][吐露する（言いにくいことを打ち明けると）]など、まず、バッド・ニュース、つまり聞き手にとっての負担や不利益といった良くない伝達内容があることを述べるマーカーになっていて、理由を先に述べる時も、結論まで発話のターンを保持していた。この冒頭の談話マーカーによって、聞き手はバッド・ニュースの全容がつかめるまで、待つことができる。つまり、日本手話では、「結論を先に言う」だけでなく、「結論まで一気に言う」方略がとられている。相手のフェイスを侵害するメッセージを伝えるときでも、言いよどみをせず、途中でターン交代をしないのが、日本語と比べると顕著であった。

さらに、この談話採集に際して、スクリプトを提示したとき、「(1) 辞める前に相談、(2) 辞めると決めたと報告、(3) 辞めるとすでに上司に言った後に報告の(1)～(3)のどれですか」とほとんどのろう者が確認した。また、事後インタビューでは「バイトを紹介してもらったとしても、自分が辞めると決めたらさっさと辞めてから報告するのが普通」という人もおり、辞める・辞めないは個人の問題だから、紹介したとしてもそこまで謝ってもらう意味を感じないというような個人主義的な面と、「辞めるときちゃんとしないと、次のろう者が雇ってもらえなくなるから辞め方については情報収集をする」という、マイノリティグループらしい感想が得られ、これに対応して、課題のなかでも辞め方についてアドバイスを求めるという[相談]

や、徐々にフェードアウトするように、スバツと辞めない方がいいなどという助言が行われていた。

③低負荷の謝罪

スクリプト：オンラインで話をする予定だったが、Aは電車の遅延で、帰宅が遅くなり、約束の時間に10分ほど遅れてしまった。遅れることがわかった時点でLINEで連絡した。Bは、約束の時間通りパソコンを開いて待っていたが、LINEをするスマートフォンを別室に放置しており、連絡に気づいていなかった。

基本的には、遅れた方は電車遅延という不可抗力であって、自分の責任でなくとも、遅れてしまったことに軽く謝罪をし、「電車の事故だった」と言い、「さっきLINEしたけど」「ああスマホ放置して見てなかった、ごめん」とお互いの行き違いを軽く修正し、早速会話をはじめるという手順であった。

興味深いのは、このうちの一組（双方、親もネイティブサイナーのペア）だけが、遅れた理由の説明を極めて長く行った。どこでどのように遅延に気づき、遅れを取り戻すためにどのような乗り換えをして帰ってきたかについて具体的に説明したのである。これについて、事後インタビューで問うと、「見えていないことについて、できるだけ多く情報を提供することがマナーである」という信念が得られた。短く談話を終わらせたその後の実験参加者に、長く遅れた理由を説明しなくてよかったのか問うと、「10分程度では、簡単に電車の事故程度に説明し、さっさと話を始めるほうがよい」「長く説明するほうが、言い訳がましく、嘘をついているように感じてよくない」という見解もあった。遅れた時間が1時間など、もっと長ければ、できる限り説明をするかもしれないという参加者もいた。

この「自分が経験したことについて、できるだけ多くの情報をコミュニティに共有すべき」というマナーについては、本研究の参加者より、70代以上など高齢のろう者でよく見られる。これは、狭いコミュニティに外から得た情報をできるだけ多く流通させるという生存方略によるものようで、祖父母もろう者という参加者は、年配のろう者は、些細な情報でも細かく長く話すか、逆に情報が得られていなくて素朴な会話になるかのどちらかであるという世代差を感じているとのことであった。

今回の参加者は、大学生ないし大学を卒業した社会人だったため、自分でインターネットなどを駆使して情報を得ることができ、かつ生まれ故郷の聾学校を中心とした狭く親密なコミュニティだけでなく、全国規模の大学生の集団に参加しており、話し方も家族のような話し方ではなく、また日本語の影響を受けていると自ら分析したり、ペアの相手を「聴者の話し方みたいだった」という感想を述べる者もあり、ろう者と聴者の話し方の違いに、何らかの感覚を持っていることがわかった。

4. 考察と今後の課題

本研究では、若い世代のネイティブサイナーが、実際の友人関係に基づいて用いるポライトネス方略を分析できる素材を作り、それを分析した。アメリカ手話や日本手話のポライトネス方略についてはすでにDCTを用いた研究がなされているが、本研究では実際の人間関係を反映したやりとりを採集し、談話構造を対話によってどのように作るのか観察することができた。このことによって、相手の反応を見ながら進む会話でも、構造として、依頼内容の詳細が3つある場合、3つあることを明示してすべてを話し終えるよう対話が進むことや、高負荷のフェイス侵害でも相手に察してもらって戦略が採りにくいことがわかった。フォークセオリーで、「先に結論を言え」というルールが語られるが、これは、最初から結論を言うだけでなく、発話の「見通し」を示す談話マーカーの使用の重要性が浮き彫りになった。談話のはじめでブイや、[本当(実は)]や[説明(説明すると)]を用いると、聞き手はひとまとまりのターンが終わるまで待てるが、おそらく学習者はそれらが欠けているので、「先に結論を言って欲しい」という感想になるのだろう。また、日本語が言いさしなど文末で態度を示すのに対し、日本手話ではこれが文末でなく文頭にあることが今回の発見である。

ほとんどの参加者が①依頼の断りで、やさしい嘘を使ったことで、ろう者は相手を気遣う能力がないから「直接的になる」という言説は否定できることを確認した。これは吉岡(2013)でも報告されていたが、対話相手がいる時も同様であったことが追認できた。また、事後インタビューにおいて、彼ら独自のポライトネス方略への規範意識があり、採録したロールプレイはその規範に沿って行ったという証言が得られた。特に、②の高負荷の謝罪談話で再現されたとおり、日本語と異なり、日本手話では先に結論を述べる、あるいは、

談話マーカーを使って理由から結論まで一気に話すということに重きが置かれており、相手に察することを強いるオフレコード戦略は失礼だという意識があることがわかった。

単語の並びだけ追っていると、米川(1984)が言ったように「敬語がない」という結論になりかねない部分もあるが、非手指要素が「言にくい、受け入れてもらにくい依頼」「積極的な依頼」で異なっていることなど、フェイス侵害行為を和らげる態度の表明を担っていることがわかった。

参考文献

- 宇佐美まゆみ (2019) 「BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システム セット(2019年改訂版)」『語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築 とその多角的な研究』平成 30 年度~令和 3 年度 科学研究費補助金基盤研究(A)-(課題番号 18H03581) (研究代表者:宇佐美まゆみ)研究成果.
- 市田泰弘 (2005) 「手話の言語学 第 9 回 頭の動き・位置と顔の表情—日本手話の文法 (5) 『文タイプと従属節』」月刊言語 34(9): 94-101.
- 大塚愛子 (2019) 「日本語と日本手話における語用論的ストラテジー—日本手話使用者の日本語と日本語使用に対する主観—」第 23 回 AJE ヨーロッパ日本語教育シンポジウム 報告発表論文集, pp.424-235.
- 坂田加代子・矢野一規・米内山明宏(2008) 驚きの手話「パ」「ポ」翻訳～翻訳で変わる日本語と手話の関係～.星湖社.
- 佐野立太郎 (2019) 「Yes/No 疑問文習得のための道しるべ」第 45 回日本手話学会大会・第 19 回日本手話教育研究大会 (合同大会) 口頭発表.
- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』くろしお出版.
- 高嶋由布子 (2020) 「危機言語としての日本手話」国立国語研究所論集 18: 121-148.
- 高嶋由布子 (2023) 「語用論」菊澤律子・吉岡乾 (編) 『しゃべるヒト ことばの不思議を科学する』34-46. 文理閣.
- 吉岡佳子 (2013) 「日本手話におけるポライトネス」手話学研究 22: 3-36.
- 米川明彦 (1984) 『手話言語の記述的研究』明治書院.
- Brown, P. and S. C. Levinson. (1978) "Politeness: Universals in language usage." *Questions and politeness: strategies in social interaction*, ed. By Esther Goody, pp.56-234. Cambridge University Press.
- Brown, P. and S. C. Levinson. (1987) *Politeness: Some Universals of Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (田中典子[監訳] (2011) 『ポライトネス: 言語使用における、ある普遍現象』、研究社.)
- George, J. E. (2011). *Politeness in Japanese Sign Language (JSL) Polite JSL expression as evidence for intermodal language contact influence*. Ph.D. Thesis, University of California, Berkeley.
- Hoza, J. (2007) *It's not what you sign, it's how you sign it: politeness in American Sign Language*. Gallaudet University Press.
- Liddle, S. K. (2001) *Grammar, Gesture, and Meaning in American Sign Language*. Cambridge University Press.
- Mapson, R. (2014). Polite appearances: How non-manual features convey politeness in British Sign Language. *Journal of Politeness Research*, 10(2), 157-184.
- Mitchell, R. E., & Karchmer, M. A. (2004). Chasing the Mythical Ten Percent Parental Hearing Status of Deaf and Hard of Hearing Students in the United States. *Sign Language Studies*, 4(2), 138-163.
- Newport, E. L. and R. P. Meier (1985) The acquisition of American sign language. In: D. I. Slobin (ed.) *The cross-linguistic study of language acquisition: The data (Vol. 1)*, 881-938. Lawrence Erlbaum Associates.
- Roush D. (2007) Indirect Strategies in American Sign Language Requests and Refusals: Deconstructing the Deaf-as-Direct stereotype. In: Metzger, M. & F. Earl (eds), *Translation, Sociolinguistic, and Consumer Issues in Interpreting*, 103-155. Gallaudet University Press.
- Searle, J. R. (1969) *Speech Acts: An Essays in the Philosophy of Language*. Cambridge University Press. (坂本百大・土屋俊[訳] (1986) 『言語行為—言語哲学への試論』、勁草書房.)
- Searle, J. R. (1975) "Indirect speech acts. In Speech Acts," In Cole, P. & J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics*, 59-82. Academic Press.